

古代史に遡ろう

第 37 回 -古代の船と航海 その3-

一万数千年も続いた縄文時代はモノが広範囲に移動する時代であった。「縄文時代の商人たち」小山修三・岡田康博対談は三内丸山で活躍した商人像を想定し、更に経済人類学、民族学、考古学の最新成果をもとに、交易舟を駆使する縄文商人の姿を明らかにしようと試みている。超高級品の貴重なヒスイ、鏃やナイフなどの材料として使われた黒曜石、接着剤であったアスファルトなどが三内丸山へと原産地から運ばれてきた。誰がこれを運んできたのであろうか？陸上よりは「水上の道」を利用する方が、長距離を結んで物資を運ぶ交易には利便性が高かったと考えられる。そこで、縄文の三内丸山でも交易舟を駆使する商人・海民が想定されるのである。

三内丸山は縄文前期中頃に始まり、縄文中期（5000年～4000年前）に最も繁栄した集落であり、その後いまだ明らかにされていない原因により消滅した。この遺跡の発掘は1952年に着手され、その後中断もあったが本格化調査は現在も継続している。広範囲な土地を100年かけて掘る、日本で初めてのスケールの大きな発掘である。その現地を訪ねた記事は第24・25回の本欄に収載したとおりであるが、その発掘により多くの新事実が明らかとなり、縄文は「狩猟収集経済」で「非定住」の閉鎖的な小さな社会しかなかったという常識は完全に覆されたのである。

交易でまず着目されたのはヒスイで、その原産地・糸魚川と三内丸山との間には両地を結ぶ「海上の道」があったと考えられる。少なくとも1000年近くに亘る長期間、ヒスイが入ってきていて、三内丸山に移住あるいは技術を学んだ職人集団により加工され、周辺に供給されているのは事実である。糸魚川からの往路は比較的ダイレクトに来て、帰るときは海流の関係でいくつもの停泊地を経由して帰ったと考えられ、その視点で日本海沿岸各地の遺跡の見直しが行われている。交易がどのように成立していたか、モノとして三内丸山の交易品が北陸に行っている証拠はないが、腐ったり消費されて残らないものの可能性が多分にあり得る。それはクリや漆製品、或いは土器造りのノウハウなどではないかといわれている。長野の霧ヶ峰や和田峠、そして佐渡からも黒曜石が「海上の道」を通して三内丸山に入ってきていた。

大林組の作成した三内丸山に港が存在したというシュミレーションの見事な映像がある。集落の中心から北に向かう幅員12mの道路（両側に墓）は発掘に伴ってどんどん延びて420mにまで達した。民家につかり、発掘は港が予想される場所までは届かなかったが、周辺のボーリング調査は行われている。ラグーン（湿地）があって、自然の水路が陸奥湾に通じている感じである。道路の終点に舟を繋ぐところ（港）があったが、これは正面玄関で、ラグーンにつながる川沿いに食料や交易品を運び込む通用口がいくつかあったと想像されている。

三内丸山からは丸木舟はまだ出土していない、低地の発掘がまだ行われていないので、出る可能性はありと考えられている。現在見つかっている同時代の舟は前々回（その1）に紹介したが、近年出土の8m級の単材丸木舟は十分に外洋航海の出来る性能を有している。この時代、丸木舟を二艘うまく繋いで対波性をふやすとか、アウトリガーをつけて帆を張るとかまた板を立てて喫水を深くするとか、海人族は外洋で操船する知識を持ち、それを活かしていた。彼らは気象や海象を読み、また山立て航法にも習熟していた。この遺跡の海洋的要素として、著名な六本柱の建物は灯台式なものである可能性が多分にある。北への航海は船団を組んで行われたが、海流に逆らう南への航海は各寄港地に立ち寄り、従って個別なものになっていたであろう。日本海側には良港が少なく港は各河口を遡った場所にあった。近世に盛んであった北前船の前駆となる交易活動が縄文商人（海人）によってこの地域で行われていたのである。

縄文中期の全盛期を過ぎると、寒冷化・病虫害などのいろいろなマイナス要因の重なる時期が始まり、大規模集落のシステムの維持が困難になっていった。この富山と三内丸山を結ぶ海のハイウェイがその後どうなったかは判っていないが、ヒスイなどのモノは列島各地に広がっていったので、ハイウェイ経由の情報伝達は有効に働いていたのであろう。縄文晩期から弥生時代の始まり（紀元前300年）となると、日本列島では力の中心が西日本へと動き始め、中国や朝鮮半島との往来が盛んになると共に東シナ海や対馬海峡が交易の動脈となった。渡来民と稲作の普及と共に西日本の人口は俄に増加してくる。やがて珍重されるヒスイが朝鮮半島まで運ばれる西向きの「ヒスイの道」と、逆に対馬海峡を渡って、那の津から、温泉津、出雲を



経て丹後から東へむかう「鉄の道」が形成されてくる。

朝鮮海峡を挟む半島南部や北九州及び日本海沿岸の「クニ」は交易活動を通じて成長し、やがて国となっていく。彼らは荒れる冬期は避け、長距離の航海は夏場の季節の良い時を選んで航海した。その時に使われた船は豊岡市出石の袴狭遺跡の線刻画のようであったのであろう。1989年出土のこの画は、紀元前1世紀頃に日本海を走る16艘の船を描いたものである。船は船首が高く上がった外洋航海用の手漕ぎの準構造船（丸木舟に上部構造を積み重ねている）で、16艘は明らかに船団を組んでおり、実際にあった光景を描いたものであろうと専門家に認められた。この頃、貨幣や度量衡ももたらされ、取引に使用され始めたと考えられている。

西暦25年に後漢が建国、光武帝が即位し、後漢書には57年奴国王（北九州）が朝貢し金印を授けられた、107年倭王師升の使者が洛陽に行き、生口を天子に献じたなどの記事がある。対馬海峡、さらに東シナ海を渡航することができる船と航海術があったことが判る。船の構造や形を工夫して速力を上げ、操船技術を高め、さらに風、波、潮流を研究し、渡海の手助けを選んだのであろう。北九州には玄界灘や対馬海峡を渡る技術を確立していた海人がいただけでなく、朝貢の儀礼を整えて航海することも出来ていたのである。

その後倭国大いに乱れる、争いは鉄の交易を巡る主導権争いであると云われている。中国においても後漢は衰退し、魏、呉、蜀の三国時代となり、三国志が記す様な多くの戦を経て、魏が制覇し遼東の楽浪・帯方の二郡を接収する。その翌239年に倭の女王卑弥呼の使者難升米、帯方郡にいたり、次いで洛陽にいたり朝貢する。この船団は、海峡の覇権を争って、この海域を動き回り交易や乱闘を行っていた雑多な船団とは明らかに違っていたであろう。両舷が高く、船首、船尾にドラゴンのような飾りのある帆も装備した最新鋭の船であったと推測される。構造は竜の首を持つ船首、幅広の胴、そして竜のような船尾を持つ前後三つの材を中央部で接合していた。この以前から揚子江流域からの流民の渡来が盛んにあり、大船の造船技術は十分に伝わっていた。

280年呉が魏に滅ぼされたとき、多くの遺臣・遺民はその船で海を渡り、朝鮮半島や倭国に漂着した。この船団が、その土地の有力者により再編成され、交易に活用されたことは容易に想像されるところである。この時に羅針盤が伝わり航海技術の革新がおこった。4世紀に入って東アジア特に朝鮮半島の動乱と共に新羅に迫られた有力者秦氏（弓月の君）、漢氏などが大挙移住してきた。その舟運を提供したのは、応神天皇と葛城襲津彦であるといわれているが、その船は推定10～20トン、難民20～30人と家財道具や馬数頭が積める大きさで、呉と馬韓のあいだに就航していた船と同等のものであった。これらの2万といわれる人数の移住者はまず、宇佐に集結しそこから畿内へと広がっていった。

さて、日本海では船団航行が活発に行われている一方、瀬戸内海ではどうなっていたであろうかということが残った問題である。「古代史の謎は海路で解ける」で長野氏は、記紀の神武東征や神功皇后の東征・帰還を否定し、瀬戸内海の船団航行を可能ならしめたのは五世紀半ばの雄略天皇であるという新しい痛快な議論を展開している。瀬戸内海には数多くの狭隘な海峡が要所々々に存在し、汐の干満による潮位の高低差で1日に2回に東西に強い流れを生じ、また基調として全体的に東に流れる潮流もあり、最強時の流速は特定の場所では10ノットを超えることもある。手漕ぎ船にとっては危険な状況が一定時間に繰り返し起こっており、更に通過する船にとって脅威的障害物である水面下の岩礁が随所に存在する。長野氏は住吉大社に祀られている三神は、実は雄略天皇が呉から招聘した技術者であり、底筒男命は水中障害物を除去して航路を開く、中筒男神は航路・港の浅深測量、表筒男命は潮流の調査をそれぞれ担当し解決したのであろうと推測している。

しかし、このような技術的問題の解決だけでは瀬戸内海で船団を組んで軍が航行遠征するには不十分であり、水や食料の補給はもとより船の補充を含めたロジスティックな手配を欠かせることは出来ないという指摘は長野氏の卓見である。雄略天皇は瀬戸内海中央部に割拠する吉備氏を傘下に収めると共に、宗像海人族と現地に長期に亘り滞在して、海を見下ろす高所に散在する高地性集落住民に漕船・操船や漁業の技術指導を行い、山を下ることを奨励し水夫を養成した。また適地を選び船の建造を盛んにすると共に、入江や島陰の汐待場、水場などを調査確認したのである。造船が行われた倉橋島では、のちのちまで遣唐使船の建造が続けられ、またたとえば塩飽諸島で水夫に養成された住民の後裔は、1000年後に村上水軍や「塩飽の水主」として歴史上高名をはせることになる。

文献 1. 縄文時代の商人達 小山修三・岡田康博 洋泉社（2000）

（岡野 実）

2. 古代史の謎は「海路」で解ける 長野政孝 PHP新書（2015）